



緊張絶えず中等症以上の重症患者を受け入れる
コロナ専用病棟

動かすものは使命感

昨年5月に抗原検査、続く8月にPCR検査機器がそれぞれ導入され、検査体制が充実してきました。現在、コロナ病棟の看護師の勤務体制は2交代制で、日勤が4または5名、夜勤が2名体制となります。コロナ病棟は一般病棟と完全に遮断されています。ウイルスが一般病棟や外来の診察室に広がることはありません。コロナ病棟内もレッド、イエロー、グリーンと3つの各ゾーンに区別されており、それぞれも扉やビニールカーテンで仕切られて



新型コロナウイルス感染者を搬送し、ストレッチャーに乗せて運ぶ救急隊員とスタッフたち

います。入れる人を明確に制限、区分けしています。患者がいるレッドゾーンに入った看護師は、3、4時間は外には出てこられません。水分補給すらできない状態で看護を続けまです。出てくる時は、イエローゾーンですべての防護服などを指定のダストボックスに捨て、しっかりと洗浄と消毒を行う必要があります。また食事も一人ずつとなり、仲間とコミュニケーションを取ることも許されていません。

変異株と死

今年の1月以降、新型コロナ感染者および重症者が急増します。いわゆる「変異株」が全国に拡大し、北播磨も例外ではありませんでした。従来株より感染しやすく、重症化しやすい変異株に感染した患者で、コロナ病棟は異例の状態が続きます。満床状態が続く病床、重症患者の死、先の見えない状況にスタッフたちは心身ともに極限状態となっていました。

重症化していく患者と当然のことながら家族は面会できません。そればかりか、家族は最期を看取することも出来ません。落ちていく酸素濃度計を見ながら患者は孤独に最後を迎えます。「こんな残酷なことがあっていいのでしょうか、患者さんや家族の無念を思うと胸が苦しくなります」。

最後に

治療の甲斐もむなしく亡くなられた人をスタッフは何人も見てきました。「治療があれば・・・。治っていたかもしれないし、助かる命があったかもしれない」。そんなやり切れない思いの中、患者の死に向き合い、今、この瞬間も、看護師たちは葛藤を抱えながら業務に就いています。

最後に岸本室長からのメッセージをお伝えします。「感染予防を徹底してください。加西病院は全力で、入院患者さんを全て受け入れます。ただし、患者さんが増えてきたら病床もなくなり看ることができません。だから皆さん感染予防をお願いします」。



感染症患者を病室に運ぶスタッフ

加西市民のため

第3波の緊急事態宣言が出るまで、入院患者を受け入れたのは北播磨で加西病院だけでした。「救急車から、発熱患者です、と言われるだけでコロナかどうかわからないまま受け入れをするので怖かったです」と限られた人員で対応にあたる中、「自分が感染してはいけない」という緊張感の中で働いている精神的な不安を岸本室長が吐露しました。「加西市民の場合は満床でも無理やりベッドを押し込んで対応しました。本当に全部受け入れました。これが加西市民のための病院の使命。加西病院の頑張りです」。続けて「自宅で苦しみ続けた加西市民はおそらくゼロです。1年間ベッドコントロールしてきた経験があったから乗り切れました」。



変わらぬ3つの役割
生田肇・院長兼事業管理者

第2種感染症指定病院として、感染拡大の当初より軽症、中等症の患者を受け入れてきました。優秀なスタッフの頑張りにより、北播磨の中でも、加西病院の存在が認められたことがよかったですと感じています。そして、コロナによって、改めて感染病棟の重要性を認識し、新病院の計画の中にも、感染症病棟を組み入れていきたいと考えています。ポストコロナ時代も同じように、これからも急性期としての役割、回復期としての役割、そして感染症指定病院としての役割、この3つの役割を加西病院はしっかり果たしていきます。

加西病院責任者に聞く



職員にただただ感謝
山中恵・副院長（看護部長）

感染病棟に勤務する看護師は大変な苦労が強いられます。看護中は長時間、水分補給もトイレも行けません。家族等に感染してしまいうリスクがあるにも関わらず、「やります」と言ってくれたスタッフ、人員が少なくなつた一般病棟を支えてくれたすべてのスタッフに感謝しています。

パンデミックな状況を経験し、市役所や関係機関の方々との日々からの信頼関係の大切さを痛感しました。そして様々な面で支えていただいた加西病院サポーターの皆さまをはじめ多くの方々に感謝を申し上げます。



コロナ病棟の病室（左）と中等症以上の重症患者が療養している病棟に入る看護師

他地域では、入院できなかった患者の家族は泣いておられました。死がよぎるじゃないですか」と苦しい胸の内を明かす岸本室長。時に現場では過酷な判断をしなくてはなりません。